

琉球大学学術リポジトリ

小学校の宿題量評定における学年考慮の重要性

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2022-10-04 キーワード (Ja): 宿題, 小学校 キーワード (En): 作成者: 淡野, 将太, 浦内, 桜, 越中, 康治, Chuang, Chi-ching メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019460

小学校の宿題量評定における学年考慮の重要性

淡野 将太¹⁾・浦内 桜²⁾・越中 康治³⁾・Chuang Chi-ching⁴⁾

Importance of consideration for grade levels on homework evaluation
in elementary school

Syota TANNO¹⁾, Sakura URAUCHI²⁾, Koji ETCHU³⁾, Chi-ching CHUANG⁴⁾

要 約

本稿は、小学校の宿題量評定における学年考慮の重要性を指摘する。分析ではUrauchi and Tanno (in press) のデータの一部を利用した。小学校の宿題量評定として測定した主観的宿題量としての教師評定と客観的宿題量としてのjudges' ratingsの相関関係を検討した。その結果、相関係数は $r = .21$ ($p < .05$)だった。小学校の宿題量評定における学年考慮の重要性を考察した。

キーワード：宿題，小学校

目 的

宿題は、学習者が課外で行なうよう意図した教師から課せられる課題と定義される (e.g., Cooper, 1989; Cooper, Robinson, & Patall, 2006)。この定義は、学校における学習指導、メール、テレビ、オーディオまたはビデオカセット、インターネットを通じて提供される家庭学習課題、スポーツやクラブへの参加などの課外活動を除外する。

本稿は、小学校の宿題量評定として主観的宿題量としての教師評定と客観的宿題量としてのjudges' ratingsの相関関係を検討する。宿題研究においては、宿題量評定は教師による主観的宿題量が尺度のひとつとして広く用いられてきた (e.g., Chen & Stevenson, 1989; Fernández-Alonso, Suárez-Álvarez, & Muñiz, 2015; Mulhenbruck, Cooper, Nye, & Lindsay, 2000; Sidhu & Fook, 2010)。本研究は、主観的宿題量としての教師評定に加えて、心理学的測定におけ

る客観的評定方法として用いられているjudges' ratings (cf., Marcus-Newhall, Pedersen, Carlson, & Miller, 2000) を用いて客観的宿題量の評定を行なう。そして、両者の相関関係を検討する。

方 法

対象者

小学校教師118名を対象とした。平均年齢34.17歳 ($SD = 10.38$)、平均教師経験年数は10.44年 ($SD = 8.99$) だった。Urauchi and Tanno (in press) のデータの一部を利用した。

質問項目

主観的宿題量を測定するための宿題量評定1項目と客観的宿題量を測定するための自由記述1項目を用いた。主観的宿題量は、児童に課す1日あたりの宿題量について7段階評定法 (とても少ない-とても多い) で測定した。客観的宿題量は、児童に課す1日あたりの平均的な宿題に関する自

¹⁾ 琉球大学教育学部 准教授

²⁾ 沖縄県中頭郡北中城村立北中城小学校

³⁾ 宮城教育大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻 准教授

⁴⁾ University of Taipei

由記述1項目で測定した。

Judges' ratings

4名の大学生をjudgesとして設定し、教師が回答した児童に課す1日あたりの平均的な宿題に関する自由記述1項目に対して評定させることでjudges' ratingsとして客観的宿題量を測定した。評定は次の手続きで進めた。まず、宿題量評定に際して宿題の定義を概説した。次に、宿題量の多い例(e.g., 1日あたり社会科のプリント課題2枚、算数科の計算演習問題1ページ、および、国語科の84字詰め漢字ノート筆記練習1ページ)および少ない例(e.g., 1日あたり算数科の計算問題5問)を提示した。その次に、宿題量評定の訓練を行なった。仮想的宿題についてその宿題量を7段階評定法(とても少ない-とても多い)で評定させた。その際、他のjudgesの評定を参照させた。そして、教師が回答した児童に課す1日あたりの平均的な宿題に関する自由記述1項目に対してjudgesとして宿題量を7段階評定法で評定させた。その際、必要に応じて評定を遡って修正可能であることを教示した。

結果

客観的評定として用いたjudges' ratingsについてICC(intra-class correlation coefficient, e.g., Shrout & Fleiss, 1979)を算出した。4名を便宜的にそれぞれA, B, C, Dとした。その結果、絶対一致(absolute coincidence)を示すICC(2, 1)は、A-B, A-C, A-D, B-C, B-DおよびC-Dにおいて、それぞれ.54, .58, .57, .57, .67, .58だった。一貫性(consistency)を示すICC(3, 1)は、同様に、それぞれ.53, .61, .58, .61, .68, .66だった。相関係数は、同様に、それぞれ.55, .63, .60, .68, .66($p < .01$)だった。4名の平均点を算出して分析に用いた。

主観的宿題量としての教師評定1項目($M = 3.85$, $SD = 1.07$)と客観的宿題量としてのjudges' ratingsの平均点($M = 3.62$, $SD = 0.93$)の相関係数を算出した。その結果、相関係数は $r = .21$ ($p < .05$)だった。

考察

小学校の宿題量評定として測定した主観的宿題量としての教師評定と客観的宿題量としてのjudges' ratingsの相関係数が $r = .21$ ($p < .05$)となった要因として、宿題量評定における学年の考慮が影響したことが考えられる。調査では教師が学習指導を担当する児童の学年についての情報は収集しなかった。ただし、教師が主観的に宿題量を評定する際は学習指導を行なう児童の学年を考慮して宿題量の多寡を評定したと考えられる。一方で、4名のjudgesが評定を行なう際は、児童の学年についての情報を収集していない関係でその明示を行なっておらず、学年を考慮せずに宿題量を評定させた。小学1年生と小学6年生では課題そのものの多寡は変動すると考えられる。

以上より、本研究は小学校の宿題量評定における学年考慮の重要性を指摘する。宿題量を測定する研究を実施する際には手続きにおいて学年に配慮することが望ましいと主張する。

引用文献

- Chen, C., & Stevenson, H. W. (1989). Homework: A cross-cultural examination. *Child Development, 60*, 551-561. <https://doi.org/10.2307/1130721>
- Cooper, H. (1989). *Homework*. White Plains, New York: Longman.
- Cooper, H., Robinson, J. C., & Patall, E. A. (2006). Does homework improve academic achievement? A synthesis of research. *Review of Educational Research, 76*, 1-62. <https://doi.org/10.3102/00346543076001001>
- Fernández-Alonso, R., Suárez-Álvarez, J., & Muñoz, J. (2015). Adolescents' homework performance in mathematics and science: Personal factors and teaching practices. *Journal of Educational Psychology, 107*, 1075-1085. <https://doi.org/10.1037/edu0000032>
- Marcus-Newhall, A., Pedersen, W. C., Carlson, M., & Miller, N. (2000). Displaced

aggression is alive and well: A meta-analytic review. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 670-689. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.78.4.670>

Mulhenbruck, L., Cooper, H., Nye, B., & Lindsay, J. J. (2000). Homework and achievement: Explaining the different strengths of relation at the elementary and secondary school levels. *Social Psychology of Education*, 3, 295-317. <https://psycnet.apa.org/10.1023/A:1009680513901>

Shrout, P. E., & Fleiss, J. L. (1979). Intraclass correlations: Uses in assessing rater reliability. *Psychological Bulletin*, 86, 420-428. <https://doi.org/10.1037/0033-2909.86.2.420>

Sidhu, G. K., & Fook, C. Y. (2010). Organization of homework: Malaysian teacher's practices and perspectives. *Journal of International Studies*, 13, 63-78.

Urauchi, S., & Tanno, S. (in press). Homework and teacher: Relationships between elementary school teachers' beliefs in homework and homework assignments. *Japanese Psychological Research*. <https://doi.org/10.1111/jpr.12412>